

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 15 日現在

機関番号：12501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25370208

研究課題名(和文) 明治期の知とメディア言説を通してみた軍記文学の文化的展開に関する基礎的研究

研究課題名(英文) Basic study on war chronicle literature in view of the intellectual persons and media diversity in the Meiji era

研究代表者

久保 勇 (KUBO, Isamu)

千葉大学・大学院人文社会科学研究科・助教

研究者番号：10323437

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、明治期において軍記文学が「文化」として、多様化した知とメディアを通していかなる展開を果たしたのか考究するものである。『平家物語』を中心対象とした。明治末年の館山漸之進『平家音楽史』、山田孝雄『平家物語考』が、明治期の研究の画期として位置づけられていたが、これらの前提となる状況が明らかにした。両者に共通するのは、福地桜痴が新聞紙上等で明治35年までに公表している平曲および『平家物語』に関する成果である。また、明治前期の「脱亜入欧」の文化思想的動向を超える『平家』の根強い享受層の存在は、一部の投稿雑誌(『文庫』の小島烏水)や市民による平曲継承の営み等に確認することができた。

研究成果の概要(英文)：This study investigated how a war chronicle literature had culturally changed via media diversification through the Meiji era, mainly discussing "Heike Monogatari." The "Heike Ongakushi" (music story tellers of Heike story) by Zennoshin TATEYAMA, and "Heike Monogatari-ko" (Discussion on Heike Monogatari) by Yoshio Yamada published at the end of the Meiji era have been considered as landmark studies. We have found another preceding study made by Ouchi FUKUCHI by 1902. Moreover, this study reported that there were a large readership for "Heike Monogatari" via magazines for young boys, and the culture of "Heikyoku" had been passed down by ordinary citizens.

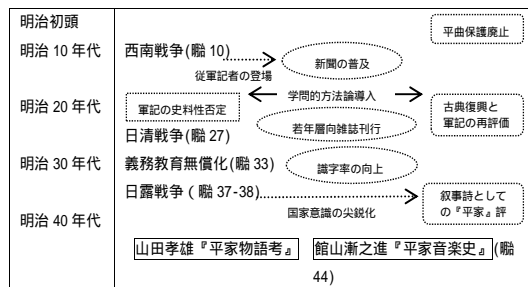
研究分野：人文学

キーワード：軍記物語 近代 平家物語 平曲 山田孝雄 館山漸之進 福地桜痴 梅澤和軒

1. 研究開始当初の背景

本研究では、明治期に多様化した知と拡大していくメディアのなかで、軍記文学が「文化」としていかなる展開をたどり、明治の終焉とともにどのような段階に至ったのか、その経過と様相について調査研究をおこなうものである。従来、「アカデミズム」や「文壇」といった知に限定され「明治の軍記」が論じられてきた。その中心的な問題は「叙事詩論」や山田孝雄による諸本研究の大成（『平家物語考』文部省、1911）に関するものであった。本研究では、そのような一部の動向のみでは不十分と考え、調査対象を新聞・雑誌などのメディアに広げ、それらがどのように軍記文学を取り上げ、発信源となった知の人々が如何なる活動をおこなってきたか、具体的に示していく必要があると考えたわけである。

また、国際化が進む社会的状況と自国文化への再認識が併存し、メディア言説が簇出した「明治期」は今日と共通する点が多い。混迷の時代のなかで「古典として軍記文学」が「文化」としてどのようにあり得るのか、この可能性や見通しを学問的に提示することの必要性を認識し、本研究課題を発想した。研究実施にあたって、明治の時代的背景の概略について、以下の見通しを示した。



2. 研究の目的

(1)【明治期の新聞・雑誌における軍記文学に関する言説に明らかにする】本研究の準備段階となる拙稿「明治期の『平家物語』研究 福地桜痴から館山漸之進、山田孝雄へ」（『千葉大学人文科学研究』25号、2012・9）では、『日出新聞』の福地桜痴「叙事の主眼」（明治35年1月29日）、その記事にすぐに反応した小島烏水の文章（雑誌『文庫』19巻6号、明治35年2月）に着目している。明治期にあっては、叙上で着目したようなDB化あるいはデジタル化されていない資料が多い。よって引き続きそれらの資料の中から軍記文学について書かれた言説について調査をおこない、その質的な問題（場面、人物、底本）等について検証をおこなう。

(2)【軍記文学をめぐる明治の知の営みを明らかにする】準備段階で注目した福地桜痴や大槻如電など、明治の知識人がどのように軍記文学に関わってきたかという問題について、調査を深化・発展させていく。問題の

柱として、平曲の実践と保護に関わる活動、軍記の文体に関わる問題、蒐書に関わる活動といった3つを立て、研究対象とする人物は福地桜痴、大槻如電、徳富蘇峰を候補とした。平曲の実践と保護に関わる活動については、館山漸之進『平家音楽史』の再検討とそれに加える情報をまとめること、軍記の文体に関わる問題については、アカデミズムや教育界に限らず言文一致問題に関して知識人等が今後あるべき文体を論ずるなかで、如何なる文脈によって軍記物語を取り上げたか検証すること、蒐書に関わる活動については、先行研究を踏まえ、福地桜痴旧蔵書の追跡、徳富蘇峰の蒐書（成賞堂文庫）などを調査することを目的とした。

(3)【明治末年の山田孝雄『平家物語考』、館山漸之進『平家音楽史』にいたる研究史的経緯を掘り下げる】明治の研究史にあつては、上の2大研究の成果があまりに大きいため、これらの前提となる状況については寡聞である。2大研究はアカデミズムにおける知と認識される向きが多いと考えるが、両者とも当時のアカデミズムを代表する帝国大学における国語国文学研究の流れとは、異なる背景から生み出されている。『平家物語』が前近代から継続して享受されている背景、近代に入っても幅広い享受者層に支えられていた事実を明らかにすることで、両研究の大成に至る空白を埋めることが可能となる。

3. 研究の方法

本研究は、準備段階での研究を基盤として、以下の4つの研究活動をおこなう。

(1)【文献調査】国立国会図書館や国文学研究資料館蔵の新聞・雑誌資料を調査する。特に、DB化されていない『朝野新聞』『日出新聞』（マイクロ）、若年層向け雑誌『少年園』『文庫』『日本之少年』等が対象となる。また、館山漸之進や山田孝雄、梅澤和軒といった人物に関わる地（青森、富山、山形等）に伝えられる史資料、京都波多野流の伝承に関わる史資料（京都）等について、現地における資料収集をおこなう。

(2)【調査データの集積】明治期の著作物は著作権保護期間を超えたものが多いので、当該研究の今後を見据え、可能な限り資料をデジタル化して集積させていく。作業にあたっては、適切な資料を選定し、業者に委託して蓄積させていく。

(3)【研究交流活動】対象が軍記文学であるため、「軍記・語り物研究会」会員との交流、時代やジャンルを横断する研究会（立教大学）等での小報告を实践することで、客観的助言を受けつつ、研究を進めていく。

(4)【成果報告活動】研究対象となる時代が「中世」から「近代」へ横断しており、文学研究に関する所属学会（中世文学会等）での発表は現実的ではないため、軍記文学というジャンルから、「軍記・語り物研究会」（研

究例会、於：都内)での研究発表1回を計画する。研究論文については、所属機関の紀要等に1本以上の発表をおこなう。

4. 研究成果

(1)【福地桜痴 - 近代『平家物語』研究の前提】本研究の準備段階で見通していた問題であったが、本研究期間で加えた成果を合わせて示す。福地桜痴については、『平家物語』の本文研究と平曲の継承・実践の2点が重要である。前者については、諸本を収集し比較研究をおこなっていたことである。前近代における諸本本文の比較研究は水戸彰考館による『参考源平盛衰記』が最も大きな成果であり、近代に入ってから本格的な諸本の調査・比較研究は、山田孝雄『平家物語考』(1911)と認識されている。『考』よりも水準は低いとはいえ、その前提となるのは福地桜痴が「叙事の主眼」(『日出新聞』明治35年1月29日)であり、諸本の比較による成立の先後を論じており、特に注目されるのは、付記ながら「延慶本が長門本より古き乎と思はるゝ節もあり」と指摘しており、山田孝雄の結論の約10年前に同じ見解を示していたのである。

後者については、桜痴の父・苟庵が篠崎小竹を師とした大坂修業時代まで遡る問題となる。篠崎小竹は朋友頼山陽の影響で、平曲を語るようになった。小竹が苟庵に語ったところによると、当初は平家物語の文章を「暗誦」する興味によるものだったが、琵琶法師の平曲を聴いて「平家を語る様になった」という経緯が知られる。このような幕末知識人・頼山陽・山本亡羊による平曲の実践について追加調査を進めたところ、彼らの実践にあっては語りの巧拙は問題ではなく、文意や文章修養(暗誦)が第一であったことがわかる。明治期にあっては、酒席等で実践された桜痴の平家琵琶は総じて悪評に終始しているが、幕末知識人の平曲実践の延長にあったと位置づけられる。「桜痴にとって「語る平家」の実践と本文の研究は一体のもので、「国語」を支える営みであった」という、研究準備段階での見通しに加えれば、前近代の知識人の営みを、新しい「国語」を必要とした近代に架橋した仕事とも言える。文部省国語調査委員会による山田孝雄の『平家物語』研究に先んじ、新聞・雑誌等のメディアを介して、近代に『平家物語』を再生した桜痴の功績は更に調査(歌舞伎脚本等)を重ねる必要がある。

(2)【梅澤和軒 - 忘却された研究史】明治期の研究史において、研究文献目録等に名のみは伝わるものの、その研究の意義についてほとんど論じられなかった梅澤和軒(精一、1871-1931)について検証をおこなった。明治40年から43年までの間、梅澤は館山漸之進から史資料を借り受け、館山の『平家音楽史』(1910)執筆にあたっては「近代の編纂法」を指導する立場にあり、両者は共同研究

者的な間柄であった。文部省国語調査委員嘱託として、梅澤・館山よりやや遅れて山田孝雄が『平家物語』研究を開始することとなる。結果的に山田の『平家物語考』が、近代『平家物語』研究の礎として評価されるに至り、梅澤・館山の先行研究は閑却されていった。

(3)【『平家物語』の批評】大津雄一氏(『平家物語』の再誕、2013)が「英雄の発見」と指摘したように、『平家物語』における登場実物を取り上げ、近代の価値観(カーライル『英雄及び英雄崇拜』)を導入して、評するようになったのは、明治期の特徴的な文化的動向であった。軍記物語の登場人物が前近代における紀伝体の史書等(例:『大日本史』)で取り上げられたのとは異なり、作品の「読み」から批評の俎上に上せられたわけである。大津氏が論じられるように、高山樗牛、芥川龍之介、山路愛山といった批評家、作家らの著作に上ることが確認できるが、この基盤として、明治期に流行した青少年向けの文芸投稿雑誌の存在は看過できない。本研究では明治28年から43年まで発刊された『文庫』における小島烏水の『平家物語』評、市原隆作の投稿少年期の動向等を指摘するに止まったが、このような投稿雑誌の存在は文筆を志す青少年を育むメディアであると同時に、『平家物語』の記憶を共有する国民の裾野を広げ、後代に繋げる役割を果たしたと考えられる。

(4)【近代における平曲の衰退】近代「平曲」の衰退は、制度的な幕府の保護を失った(盲官制度の廃止)ことによって説明されることが多い。また、明治末にかけての館山漸之進による「平家音楽」の研究活動と東京音楽学校における保存活動によって、今日に至るまでの平曲が維持継承されていることもよく知られている。本研究では、明治政府による盲官制度廃止後の歴史(加藤康昭『日本盲人社会史研究』1974)を確認するとともに、京都波多野流最終継承者・藤村性禅および東京前田流継承者・福住順賀に関する調査を進めることで、従來說明されることの少なかった明治期の「平曲」の衰退の実態について明らかにした。京都・藤村性禅も東京・福住順賀も、晴眼の市民に平曲を伝承していた点で共通し、京都には「重陽社」、東京には福地桜痴らが組織した「平曲保存会」という団体が存在していた。重陽社は、波多野流の一般受けしなかった語りと一般に開かれぬ規律によって閉塞し、師の死とともに衰退を迎えた。一方、平曲保存会は明治39年の福地桜痴の死、大月如電の離脱以後は、深川照阿と木全宗八によって辛うじて維持されていたが、趣味の域を出ず、東京を拠点とする伝統に裏打ちされた平曲の保存と実践は、館山漸之進一人が担う形となったわけである。

(5)【史跡紀行・郷土史への着眼】本研究にお

ける調査活動を通じ、さらに掘り下げるべき問題として、地域を記述する際に想起された軍記物語の「記憶」について着眼を得た。これは、市原隆作『悲壮史蹟屋島と壇の浦』(文成社 1911)で取り上げた「史蹟めぐり」の章や、『平家物語』の史跡を有する各地(北陸・屋島等)で編纂された郷土史(自治体史)の調査によって、具体的に深化していった問題である。たとえば、地方改良運動に伴って郷土史編纂事業が各地で活発になったと説明されているが、軍記物語の「記憶」を有する地域においては、別の要因も探ることが可能である。このような問題について、挑戦的萌芽研究(平成28~29年度 課題番号16K13191)「近代「地域」の記述と『平家物語』の「記憶」をめぐる研究 史蹟紀行・郷土史を対象に」の採択を得て、研究活動を発展・継続中である。

(6)【地域における近代軍記物語享受史の深化】当該研究において市原隆作(前掲著)の調査研究を通じて、研究拠点(千葉)のある房総地域について、さらなる課題が発見された。明治から大戦前の間、『平家物語』の一部諸本(延慶本、源平闘諍録等)に登場する「千葉氏」について、近代市民がどのように受け止め、その歴史を語り継いで今日に至っているかという問題である。具体的には、市制開始前の千葉町時代に自治体が主導して設立された「千葉氏研究会」の実態、白鳥健や吉田{王偏に幾}(たまき)ら初期社会主義者による「千葉氏」に関する著作等について考究するものである。この問題について、平成29年度千葉市・大学等共同研究事業「千葉氏」と市民に関する研究 近現代の「千葉氏」の受容をめぐって-」の採択を得て、教育研究活動を発展・継続中である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計1件)

久保勇, 明治期 平家 の文化的展開をめぐる一考察, 人文研究, 査読無, 44号, pp.111 - 141, 2015・3
http://opac.ll.chiba-u.jp/da/curator/100039/03862097_44_t111_KUBO.pdf

[学会発表](計1件)

久保勇, 明治期における《平家》の盛衰「啓蒙」あるいは「伝統」という視点から, 軍記・語り物研究会(第400回例会), 2014年1月26日, 早稲田大学(東京都)

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

久保 勇 (KUBO, Isamu)

千葉大学・大学院人文社会科学研究所・助教

研究者番号: 10323437

(2)研究分担者 なし

(3)連携研究者 なし

(4)研究協力者 なし